

看護師にとっての倫理的問題の意味
－ 経験の記述的研究 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
河野 由枝

本研究の動機は、患者の尊厳や権利が脅かされるという倫理的な事態に対して、アドボケート行動を起こさなかった看護師を理解したいという私の思いから出発している。そこで何が経験されていたのか、なぜ動くことが出来なかったのかについて関心をもった。

私の経験を振り返ってみると、倫理的問題が生じたある経験で、私は、重たい空気のようなものに押される感覚が生じていたことや患者との関係を大切にしながら行動していたことに気づいた。その経験は、その後の実践の中で想起されていたことを考慮すると、倫理的問題に直面した看護師の経験を知るためには、倫理的問題やその状況だけでなく、看護師一人ひとりの今までの経験を包括的な視点で、個人の文脈から切り離さずに探求する必要がある。先行研究の多くは、その看護師の経験の文脈からは切り離された探求や、これまでの倫理的問題に関わる経験については触れられておらず、探求の対象が意識的に行っている行動に留まっており、自覚する手前で何ものかに動かされてすでに動き始めている私たちの身体性は言及されていない。彼らを理解するためには、看護師たちは何に従って行動しているのか、その問題をどのように感じながら実践しているのか、その経験のされ方を記述し、経験の成り立ちを理解することが、他者理解に繋がるのではないかと考えた。

そこで、臨床経験約10年の看護師3名に対話によるインタビューによって、現象を共有し、解釈学的現象学の研究方法を用いて、語りを分析し解釈した。

語りから見えてきた経験の成り立ちを、身体性を中心に検討した結果、患者が生死を伴う状況で看護師たちは、他者を引き受ける身体を備えているがゆえに、他者の状況を引き受け、それに向かおうとする在り方をしていたことを見出すことができた。また、個別の看護師の文脈に沿った語りから、倫理原則のみの検討では考慮されない身体経験や引っかかりの経験、気づきの可能性を引き出すことができた。他方、看護師たちにとって倫理的問題は、自分の居場所に歪みが生じたり、大事にしていることが出来ないことに対する抵抗としても現われていた。これらを考慮して問題を検討することは、倫理的問題の渦中にある看護師をより理解することを可能にし、そこから問題解決への糸口が開かれてくる可能性が示唆された。また、倫理的問題に直面するということは、ケアのあり方と自己の態度を問われていた。ケアはいま・ここの状況に応じつつ、それへと向かっていきながら、立ち竦まされ、反省的に自己を問い直して新たに向かっていくという、「向かう」と「自己に還る」という往還の構造をしていた。私たちは否応なく他者の苦悩を引き受け、応答する身体という存在なのだ。身体性を内包している私たちは、気づきが生じる可能性を待つことができるし、自己の問い直しや他者との対話によって、新たにケアに向かっていくことができるのだ。